

2017年11月19日<聖霊降臨後第24主日礼拝> 飯川雅孝 牧師

招詞：詩編100編

全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ。喜び祝い、主に仕え 喜び歌って御前に進み出よ。知れ、主こそ神であると。主はわたしたちを造られた。わたしたちは主のもの、その民主に養われる羊の群れ。感謝の歌をうたって主の門に進み 賛美の歌をうたって主の庭に入れ。感謝をささげ、御名をたたえよ。主は恵み深く、慈しみはとこしえに 主の真実は代々に及ぶ。

聖書：ヨハネによる福音書2章1－12節

三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があつて、イエスの母がそこにいた。イエスも、その弟子たちも婚礼に招かれた。ぶどう酒が足りなくなったので、母がイエスに、「ぶどう酒がなくなりました」と言った。イエスは母に言われた。「婦人よ、わたしとどんなかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません。」しかし、母は召し使いたちに、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と言った。そこには、ユダヤ人が清めに用いる石の水がめが六つ置いてあつた。いずれも二ないし三メートル入りのものである。イエスが、「水がめに水をいっぱい入れなさい」と言われると、召し使いたちは、かめの縁まで水を満たした。イエスは、「さあ、それをくんで宴会の世話役のところへ持って行きなさい」と言われた。召し使いたちは運んで行った。世話役はぶどう酒に変わった水の味見をした。このぶどう酒がどこから来たのか、水をくんだ召し使いたちは知っていたが、世話役は知らなかった。花婿を呼んで、言った。「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったころに劣ったものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました。」イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行つて、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。この後、イエスは母、兄弟、弟子たちとカファルナウムに下つて行き、そこに幾日か滞在された。

説教： 『カナの婚礼』

JさんとMさんの結婚式をこの礼拝堂で行いたいとのご希望を先月お聞きした時、「人生の一番大切な時になりますから、新しいスタートを祝し、ご両親への感謝を覚え、素晴らしい結婚式としましょう。」と話合いました。また「この機会にお二人の人生目標の再確認、今後の忙しい生活の中でもそれに流される事無く【軸となる基本的足場】を考えて下さい。」とも話しました。去る5日には、そのことについてお話しました。そして、四日後の23日にこの場で式が行われます。本日はその意味を込めて、2回目の説教、結婚式の意義について考えてみます。お二人のみならず、すべての方に共通することでもあります。

## 1. 結婚と結婚式の意義

さて、わたしたちの人生には決定的な時があります。誕生と死別は神が命を与え、神に命を返す絶対的な時であります。また、結婚は「創造主が造った男と女は新しい命を育むために父母を離れて神が結び合わされる厳粛な契約の行為であります（マタイ19：4-6）。いずれの時も神がわたしたちに働きかけてなされる神の行為であります。これらの中でも、結婚式には親しい者が集まり、二人を祝福する婚礼の儀を行います。この時ばかりは万障繰り合わせてお互いに喜び祝います。ところが、わたしは映画の中で見た特別な結婚式を印象深く覚えております。50年程前、スティーブ・マックイーンとキャンデス・バーゲンが演じた『砲艦サンパブロ』という映画があります。時は1926年、中国が共産党軍と国民軍の混乱にある中、アメリカの砲艦が揚子江を上り、宣教師とビジネスマンを戦闘から守る映画です。砲艦サンパブロの乗組員は初めは上陸し、酒場にも行っていましたが、中国国内の混乱が激しくなり、本国に戻ろうとするが水深が浅くなり越冬せざるを得なくなる。そのような状況の中で、水兵のスティーブ・マックイーンには船の唯一の友がいる。その友は故あって酒場で働かなければならない中国娘に一目惚れし、彼女の借金を必死になって工面し、彼女の身柄を解き放つ。アメリカ国家から認められない中国人娘との結婚の中、認められないからアメリカから伝道に来た宣教師による式ではない、この水兵と中国人娘の二人はマックイーンと相互に慕い合う宣教師の娘キャンデス・バーゲンのみの立ち合いの中で結婚式を

挙げる。厳しい環境に置かれた状況の中で真実の愛が実を結ぶ時を、ただ二人の親友が証人となって見守る。後日談としてそのように結婚しても夫の水兵は船に戻らなければならない。極寒の中、川を泳いで来た夫の水兵は妻の下に来た時、肺炎で死に、妻も身ごもったまま戦乱の状況の中で悲劇的な死を遂げる。このような一つのエピソードが映画にありました。これは特殊なケースですが、神がご臨在する厳かな光景を見る思いがしました。このような事実は、主イエスの語る婚礼の儀の意味を一層明らかにします。

○主イエスは結婚式には参加者全員が神に祝福されている喜びを語っております。

ある時、ヨハネの弟子たちとファリサイ派の人たちが、厳しい修行のため、断食をしていました。断食は聖なる神に相応しくない自分を嘆き、神に救いを求める行いです。それを見た人々がイエスに、あの人たちは神様に向けてあんなにまじめに断食をしているのに、それに控え、あなたの弟子たちはなぜそのような努力をしないのですか。不謹慎ではありませんか。と問い質します。するとイエスは「花婿（である私）と一緒にいるのに、婚礼の客（である弟子たちは悲しんで断食などできない。わたしが十字架刑についた時、彼らは断食する。」と答えられます。婚礼の場とは神の子イエスがおられる喜びの時であります。（マルコ 2 : 18 - 19）

○「婚宴」に招かれた人への勧め：招かれたことへの感謝

また、イエスは婚宴の場を天国に譬えて語られます。婚宴の場、天国にはすべての人が招かれています。わたしたちを造られた全能の神が招いて下さっている。感謝と緊張があります。礼服を着て答える必要があります（マタイ 22 : 1 - 12）。イエスの生まれた国ユダヤでは古代から人の集まる儀式、祭儀については神に招かれたという意味を持っていました。そこには、心を同じくする人たちが共同体への参加として、心を高揚させ、日常性を越えて聖なる思いに満たされる時であります。ですから、結婚式の喜びは自分たちが造り出すものではなく、神から与えられる聖なる場、そこでは参加者が祝福し、新郎新婦は感激に浸ることが出来る。わたしたちは自身の体験からそのことを思い出すのであります。また、これからの方には同じ時を与えられることをお約束するものです。

## 2. イエスが出席された「カナの結婚式」で何が起こったか

○カナの結婚式：主イエスは孤高を誇らず、平民の中で喜びを共にする

それでは実際にその場に参加したイエスはどうであったか。本日の聖書箇所は「カナの結婚式」を語ります。イエスの伝道の初めはまだ、家族とも一緒に過ごすことが出来る余裕のある時でした。カナは故郷のナザレから近くのひなびた田舎町です。母マリヤがすでに行っていた。イエスご自身も弟子たちもとともに婚礼に招かれた。すでに弟子たちはイエスと家族のように生活をともにしていた。当時の結婚式は7日間続いたということですから、彼らは後からゆっくり行った。当時道を求める人たちの集団は人里から離れて荒れ野にこもり、孤高を保って暮らしていましたが、イエスは民衆の中で生活し、ぶどう酒を飲みながら団らんの場で喜びを共にしていた。その時ぶどう酒が足りなくなった。それこそ大変。賓客を招く生涯に一度の大切なもてなしの場、楽しみのぶどう酒が切れたら婚礼の場は台無しになる。イエスに霊的な力があることを知っていた母が、心配して奇跡を起こして欲しいと依頼した。ところがイエスの返事は思ったより冷たかった。神の子はたとえ親であれ人間から指示されることを強く拒絶した。しかし、イエスは婚礼の場で一緒に楽しむ者としてその場を大切にされた。当時のユダヤの風習として、汚れを洗い身を清めるために大きな水がめがいくつか用意してあったので、思い切ってその水をぶどう酒に変えた。弟子たちはこの奇跡を見て、イエスに現れた神の栄光に畏れをなした。それに気づいたのは弟子たちだけで母マリヤもお客も召使たちも気が付かなかった。この事実には驚き感じた弟子たちは、自分の生涯をイエスに付いて行く決意をしたのであります。（ヨハネ2：1－12）

さて、来る23日は結婚式、参加する方々は誰でも神の与える喜びの中に招かれています。どうか、そのことを覚えていただければ幸いと存じます。